題目　塩田津における塩田石を用いた歴史的街路景観デザインの試み

◎　九州大学　学生会員　工士くるみ
九州大学大学院　正会員　樋口明彦
九州大学大学院　正会員　榎本碧

1.　背景と目的

佐賀県嬉野市に位置する塩田町には塩田川が流れており、有田焼に使用する陶土を天草から有田に運ぶなど、かつて川港として賑わいを見せていた。しかし、水害の多かった塩田川は直線化が試みられ、河川改修後、河岸景観が失われて川港の役割を終えた。時を同じくして、塩田津の町並み空間も変化していく。町並みの商店の表を看板建築で覆うことで、伝統的な町並み景観は徐々に失われていった。

塩田津の町並みのほとんどは居蔵造りで形成されている。町並みの景観が失われつつあったものの、居蔵家を主とする町屋はほとんど残されており、この町並みを活かしたまちづくりが可能であった。西岡家住宅が国の重要文化財に、杉光家が国の登録有形文化財に指定されたことを足がかりに、塩田津は平成 17（2007）年に伝統的建造物群保存地区（以下、伝建地区）に指定された。10 周年を迎えた昨今は白壁の歴史を感じる建物が並び、景観的に良い町並みが形成されつつある。しかし、町並み空間全体としてはまだ改善の余地がある。

そのひとつが道路舗装である。現在の道路舗装は、大部分はアスファルト舗装であるが、昔の町並みに近づけるために、カラーアスファルト舗装にしたり一部石畳舗装にしたり工夫をしている。（図１）だが、アスファルトの色に違いがあるつぎはぎの部分がある等、景観に配慮されているとは言えない。そして歩道の幅員が狭く、左右の幅員も異なり、歩車分離ができていない。近辺を通る国道やバイパスの抜け道として通行する車両が非常に多いので、住民は伝建地区には似つかわしくない交通量だと感じている。また近隣の保育園や高校の通学路だが、道路の見通しが良く車幅も広いためスピードを出す車両が多く、危険な状況である。

塩田宿線は、平成 27 年度から 3 年計画で道路の補修をすることを行政が決定した。現在の道路舗装は約 15 年前に施されたが、合意形成が十分でなく住民の意見が反映されなかった。

今回の改修では、市役所は戸別にアンケートを取り、住民が望む道路舗装に近づけるよう努力した。塩田津が目標とする大正時代は土舗装であったことから、今再現することは難しいと判断し、アスファルト舗装にするというのが市役所の舗装案だ。

一方、九州大学からは地元で採れる塩田石を使用した石畳舗装を提案した。設定時代とは異なっていても、観光客の目から見て町並み空間に石畳舗装が似つかわしいと思われることから、石畳舗装を取り入れている伝建地区は多い。

本論文では、塩田石を用いて、塩田津の道路を石畳舗装にすることの可能性について明らかにする。

2.　塩田宿線の交通量調査

現在の塩田宿線は、地元の車両に加え通過交通量が多い。特に通勤時間の朝方と夕方の交通量は突出しており、通行する車の速度も速い。地元住民、観光客、通学の学生などの通行も多い中、歩行者にとって安全とは言い難い。この現況は安全な環境に改善する必要がある。さらに歩行者が安心して歩き回れる環境になることは、歴史的街路の整備にも利点になるはずだ。他の伝建地区では、一定時間内では歩行者と自転車通行のみに制限していたり、終日車両の進入は生活者のみにしていたり、規制をかけて歩行者の安全に配慮して観光しやすい環境を作っている。また、現在の交通量が減少し、安全性が高まると石畳舗装ができる可能性が出てくる。

まずは現況の交通量を数値化し、それを元に住民の意向に沿った塩田宿線に合う交通規制を明らかにするべく、近く調査を実施する予定である。この交通規制ができると仮定し、塩田で石畳舗装が可能か検討する。

3.　塩田石を用いた歴史的石畳舗装の事例調査

塩田町において、塩田石は特に寺社の参道の舗装として頻繁に使用されている。今日、塩田町内に存在する 41 の寺社のうち 16 件で塩田石の石畳舗装を確認することができた。

これらの石畳舗装に使用されている塩田石の形状を参考にし、塩田宿線の石畳舗装にふさわしい舗装パターンを導出した。これら石畳舗装の事例について、

厚さや並べ方などより詳しい情報については現在調査中である。

4. 材料としていく塩田石の文化

道路舗装をどうするか検討していく中で、塩田石という地元で採れる石に出会った。塩田石は神社の石段や参道や石造物、家の基礎など多くの場面で使われており、現在の塩田のたたずまいを形成している重要な要素だ。今でも家の基礎や軒先に使用されている塩田石は残っているが、コンクリートが使われるようになったことで次第に需要が減っていき、衰退してきた。需要と仕事が減少するに伴い石工の後継者も減少しており、塩田石文化は存続の危機にある。

塩田宿線の道路舗装をこの塩田石を用いて石畳舗装にすることは塩田に良い影響を与えると考えられる。現在、塩田石の石積みを用いて塩田津の川港部分の復興をしようとする動きが進んでいる。それに加えて伝建地区の道路舗装に塩田石を使用すると、膨大な量の塩田石と、人手が必要になる。また、今後このような公共事業の中で塩田石に安定的需要が出てくることから、衰退している塩田石文化の復興につながることが期待できる。

5. デザイン案の作成

３で示した、塩田宿線に合った交通規制が適用できることを前提として、塩田石を用いた石畳舗装のデザイン案を作成した。

完成時のイメージ図として、２で導出した石畳のパターンを元に既存の塩田石の石畳の画像を塩田宿線の町並み写真に合成した。（図２）また、市役所が提案するアスファルト舗装案の完成イメージ図も作成した。（図３）

図１　現在の塩田宿線

図２　市役所からの舗装案（アスファルト舗装）

図３　九州大学景観研究室からの舗装案
（塩田石の石畳舗装）

6. まとめ

交通規制を適用するという条件下では塩田宿線を、塩田石を使用した石畳舗装にすることは技術的に可能である。

今後、居住者として地元住民、来訪者として九州大学の学生を対象に、デザイン案について意見を伺うアンケート調査を行う予定である。石畳舗装のデザイン案の方が塩田宿線にふさわしいと判断されれば、将来石畳舗装が実現できるように市役所に働きかけていきたい。

さらに、道路舗装や護岸整備に塩田石を使用していくことが決まれば、膨大な量の塩田石が必要になる。現在は動いていないが、塩田石の切り出しが可能な採石場は市内に複数存在する。その採石場を再び始動させることや、新たに山を切り開いて採石場を作ることも提案していきたいと考えている。